

農業を通し他大学と交流

Ⅱ 実行委、最後まで奮闘 Ⅱ

秋田県立大学の薫風・満天フィールド交流塾は2月20日から23日までの4日間、秋田県大潟村を会場に「雪まつり」を開いた。2回目となる今年のメインは全国9大学の農業系サークルとの交流。北海道や京都などから来た28人の学生と一緒に、農家での冬の農作業、秋田の郷土料理作りなどを体験したほか、スノーモービルや雪合戦を楽しんだ。農業の現状、将来について意見を交換する時間が足りないなど課題も残ったが、塾が今夏に開催する予定の「全国農業系学生フォーラム(仮称)」に向けた確かな一歩を踏み出した。

(2、3、4面に関連記事)

第2回 雪まつり開催 (2月20日から4日間)



大潟村は東北一のチューリップ産地。農業・農家体験でその栽培方法を聞き、収穫やラッピングの体験も(伊藤由紀夫さん宅)

● 多彩なメニュー

今年の「雪まつり」は期間中、農業・農家体験、郷土料理作り、雪遊びなど盛りだくさんのメニューをこなした。企画の立案、運営に当たった実行委のメンバーがそれを支えたが、メインとなったのは、他大学の農業系サークルと一緒に農業・農家体験である。

● キリタンポに舌鼓

秋田の郷土料理作り体験では、秋田県立農業短大卒業生の菊地幸彦さんが講師を務めて「キリタンポ鍋」「しょつたる鍋」に挑戦した。大きな鍋の周りは笑顔に包まれた。参加者は本格的な出来上がりになり、満足していた。

雪遊び当日の22日は、前日までの雪とは違って雨模りでも、次第に面白く真剣になり、ついには何かを探り当てられるかもしれないのだ。とかく新しいことをやる際には、真面目と遊びの境目がハッキリしないもの。そんなとき端から見ると、本人たちの意図とは別に、どこか遊んでいるように見える。身近な例では、秋田の「菜の花」運動。誰も菜の花を作ったことがなかったから、見よう見まねの「成らんじ」から始めた。もちろん真面目に。それから数年。メンバーたちは、面白がる精神と懲りない自発性を元手に、自分たちで決められる自由な領域を着実に押し広げつつあるように見える。



遊ばなきや雪まつりじゃない。白熱! 雪合戦(大潟キャンパス・フィールド教育研究センター)

ひとりの女子高生が、私に携帯電話で撮った写真を見せてくれた。相当な数の写真をストックしているのだという。朝の登校時に撮った朝焼けの空、下校時の夕暮れ雲と森の木々、日曜日の真っ青な空、一面のうろこ雲……。ほとんどは日常の「空」がテーマである。明暗をうまく使って撮すのだそうだ。

カウンセラーの私の所に訪ねてくる生徒だから、何らかの苦しさやせつなさを抱えている。それでも彼女の日常には「空」がある。移ろいやすく、だからこそ今とらえたい「空」があると思う。「空」の写真は、私の日常にもつながっているせいか胸に迫るものがあった。あたりのにおいや、木々のざわめき、透き通った空気、深呼吸を誘うオレンジの色合い。肩から力が抜けるのを感じた。

人は人と切り離されて生きられない。いろいろなたちに支えられて生きていくことを知っている。だから人が写る写真は、多く私たちが和やかな笑いに導く。しかし、空や海、山々という人のいない風景でも、なぜか懐かしさ、心に響くものがある。その写真から、色もにおいも音も触も確かに感じる事ができる。

ちよつと刺激された私も、最近さりげない風景を撮すようになった。あまり深く考えずにシャッターを押している。

(臨床心理士・佐藤順子)

特別寄稿



真剣に「成らんじ」 すること

秋田県立大学生物資源科学部長
佐藤 了

家庭菜園に勤しむ近所の人。見事なトマトやナスの出来映えだ。思わず「立派ですね」と声をかけたら「いやいや、ならんじして」と言う。大学の図書館で調べてもらったら、原義は「成らず」、「ものにならない」の秋田語。その人は謙遜したのだ。が、その玄人はだしのモノは真剣な「成らんじ」か

ら作り出されたのだ。考えてみると、「はじめから成っているもの」など、どこにもない。どんな名人だって最初は素人だ。たしかに、中途半端な姿勢で「成らんじ」するだけでは、上達を望めない。だが、やってみようの、もっと良くない。最初は「成らんじ」マネ

でも、次第に面白く真剣になり、ついには何かを探り当てられるかもしれないのだ。とかく新しいことをやる際には、真面目と遊びの境目がハッキリしないもの。そんなとき端から見ると、本人たちの意図とは別に、どこか遊んでいるように見える。身近な例では、秋田の「菜

の花」運動。誰も菜の花を作ったことがなかったから、見よう見まねの「成らんじ」から始めた。もちろん真面目に。それから数年。メンバーたちは、面白がる精神と懲りない自発性を元手に、自分たちで決められる自由な領域を着実に押し広げつつあるように見える。

屋前「気分はすっきり、プロ職人」のパンザイ。敢えて「成らんじ」してみるのは自発的精神が、内部世界をより弾ませ強靱なものにして、ついに社会の可能性をこじ開けていく力にならないと誰が言えよう。

「秋田に来た理由」

科目等履修生 岩瀬彰人

昨年、秋田県立大学に編入学することを決意した。「ここなら農業を思う存分学ぶことができる。農家とも交流が持てる。」そう確信したからだ。

一年前、某大学で研究室配属を控えていた僕は、自分のやりたいことが見つからず、焦っていた。「一年間やるなら、何かを得たい。興味を持って打ち込めるものを持ちたい。」そう考えていた。

その焦燥感から図書館に入り浸り、実験レポートは徹底的に調べて書いた。研究室にも所属前から足を運んだ。けれど何も見えてこない。研究のための研究に魅力が感じられなかったからだ。

「新聞部に入った理由」

アグリビジネス学科

1年 熊谷

彩

初めまして。私も新聞部員です。よろしくお願ひします。

「なぜ、新聞部に入ったのか」。その理由を説明して、自己紹介代わりとした。

元々、文章を書いたり、読むのが好き。薫風・満天新聞も、毎号読むのを楽しみにしていた。その私に友人から「合うと思うよ」と誘いを受けた。軽い気持ちで引き受けたが、「私はこの場で何をしたいのか」を改めて考えてみる。

これまで読んだ印象でいくと、この新聞は、薫風・満天フィールド交流

そんな中で出会った本があった。「水稲の科学」。1960年に書かれた本だが、衝撃を受けた。そこには日本が戦後の食糧難の中、米の増産を図ろうと、水稲研究に生涯を捧げた農学者たちの功績が、実験の手法とともに詳細に綴られていた。僕は貸し出し禁止のその本を片っ端から印刷した。

「オレは本当に農業を勉強しているのか？」農業は農業を土台として成り立っている。食糧生産に責任を負う、もつとも実学であるべき学問だ。しかし、前の大学の学科では、生命現象を明らかにすること自体を目的としていた。農業生産

塾の活動を知り、伝えられる、とてもいい場所だと思ふ。紙面には、キャンパスでは見られない友達達の意外な一面や、先輩、教授たちのかっこいい姿が、掲載されていたからである。

そんな中、私も自分自身の視点でとらえた塾の活動を、多くの人に伝えられる。発信源になれるのだ。それを嬉しく思う自分がいる。

入部して初めての活動は、八郎瀧印刷(八郎瀧町)見学だった。パソコンを使った新聞の構成の仕方を教わり、新聞作り

の現場など全く見えてこない。突然それがとても虚しいものを感じられ、同時に疑問が湧いてきた。

「今の農業は農業に対して何をしている？繁栄どころか荒廃を招いているのではないか？農業はいつから現場を離れてしまったのか？」

本印刷が終わるころには、自分がやりたいことにやっと気づいていった。

「農業生産の現場を知りたい。かつての農学者のように、本当の意味で食糧生産に貢献したい」そして僕は、上野から寝台特急に揺られること9時間、五月晴れの朝JR八郎瀧駅に初めて降り立った。

嬉しがってばかりはいられない。すごく意味のある、深い活動なのだと納得した。

今号には、そんな私の覚えたての記事が、散見しているはずだ。これからもこの活動を通して、たくさんの人々との出会いを大切にしていこう。新聞部との出会いに感謝して。

薫風・満天塾の人気企画「Cooking BOB(クッキングボブ)」を、先輩の伊藤さゆりさん(アグリビジネス学科3年)から引き継ぐ。私はアウトドアタイプなので、自他ともに認めることなのだが、「顔に似合わない、お菓子作りが好き」がその理由のひとつ。

地域と作った雪まつり

農業・農家体験II

今回の雪まつりの「農業・農家体験」は、大潟村と近隣の農家が受け入れてくれなければ、成り立たなかった。その意味では「地域と作った雪まつり」とも言える。協力農家のプロフィールなどを紹介する。(1, 3, 4面に関連記事)

6次産業化

農業経営に加工も取り込む大潟村の芹田省一さんは「(有)せりた」社長。まつり期間中に開かれた講演会で自ら取り組む経営方針を伝えた。

芹田さんは、転作大豆やもち米を加工業者に委託して、納豆や味噌、餅菓子を産直ルートで販売する一などを説明。生産(1次)加工(2次)、販売(3次)を農村全体で取り組む「農業の6次産業化」が日本農業の歩むべきひとつの道だと強調した。

チューリップ生産

大潟村は東北一のチューリップ産地。伊藤由紀夫さん、大島和夫さん、工藤稔徳さんの3農家とも、水稲との複合経営をしている。訪れた学生は、育苗床を兼ねたハウスの大きさや、チューリップの品種の多さに驚きながら、収穫や調製作業を体験した。品種選択や販路といった経営上の工夫について、質問していた。

直売所

能代市の「ねぎっこ村」は、有機栽培でネギやチンゲン菜などを生産している「(有)大和農園」の直売所。名物は、甘みを増した雪中ネギ。代表の大塚和浩さんは、小学生に収穫体験をさせるなど、食育にも取り組んでいる。

新規就農者

男鹿市・船越地区でパプリカの単品目生産を行う堤拓郎さんは、脱サラ後、3年間の研修を経て新規就農した。学生は新規就農に伴う資金や技術面での困難さを実感していた。

促成アスパラの産地

秋田県は国内有数の促成アスパラの産地。三種町八竜地区のアスパラ部会長・加賀谷幸悦さん宅を見学した。

苗の生産販売

大潟村の宮川正和さんは、花や野菜の苗を主に生産している。ハウス10数棟と規模が大きく、ほかに大豆カボチャなども作っている。



学生の気持ち

アグリビジネス学科 1年 佐々木美紀

ふたつめは、この企画の中で、最高の友と出会えたからである。初めて話をした時、ピンときた。気が合う、と。あつという間に、何でも話せるようになった。その友・菅原美穂さん(応用生物科学科1年)との思いは共通している。「み

んなで料理の楽しさを味わいたい。だから2人で継ぐことにした。同じ思いになったのも、この企画に参加したからだろう。初めて先輩、同年代の人たちと協力して作ったときは、ドキドキした。だんだん話ができるようになって、やはりみんなで作るの

は楽しいなあ、と改めて感じた。一番印象に残っているのは、大潟村で手作りお菓子を作って先生のご自宅まで、シフォンケーキとかぼちゃパイを習ったこと。卵白だけであんなにケーキが膨らむんだ、ととても驚いた。両方ともとてもおいし

くできて、本当に幸せな気分浸れた。今後は四季折々の行事に合わせたお菓子作り、塾のほかに企画とのコラボレーションなど新たなことにも挑戦したいと思っている。名前が「Cooking M(ミキ)&M(ミホ)」になるかもしれないけど、請うご期待！みなさんの参加、よろしくお願ひします。



他大学から参加した農業系サークルは、熱を込めて活動報告(大潟キャンパス中講義室)

「アギーズ」(北海道大学など道内の大学)「現場から学ぶ」をモットーに夏の農業合宿など農業体験を行う。

「りんごの会」(弘前大学)キャンパス内の樹園でりんごを栽培・収穫し、そのりんごを他大学に送り物々交換。

「ACT」(山形大学)農産物を作り、販売までの活動。ダダ茶豆や温海カブ、平田の赤ネギなど地域特産物の振興にも取り組む。

「自然研究部」(宮城大学)キャンパス周辺で、水田の生物調査や山菜採りなどフィールドワークを行う。

「日本の農業に一生を賭ける!学生委員会」(東京農業大、日大など首都圏の大学)「今、自分たちが農業を変える」を合言葉に「農家に男嫁(とつ)ごう!(出版企画)」などと呼びかける。

「農業交流ネットワーク」(京都大学)全国の農家と協力関係を築き、学生のための農業体験の場を提供する。活動資金は栽培したイチゴの販売で確保。

写真グラフ



他大学の参加者をバスでお迎え。笑いで緊張した雰囲気を和らげる



ウエルカムパーティーでは、秋田県定番のなまはげに扮して登場（サンルーラル大湯）



アスパラ収穫を体験、その生の甘さも初めて味わった（三種町、加賀谷幸悦さん宅）



あいにくの雨で雪遊びの会場はぐっちゃぐちゃ。スノーモービルも悪戦苦闘（フィールド教育研究センター）



「早く焼けないかな、初めてのキリタンポ」（フィールド教育研究センター）

「また会える日を楽しみに」。まつりを無事終え、実行委のメンバーはほっと（大湯キャンパス）



4日間という盛りだくさんのメニューをこなした「雪まつり」。主催者の実行委のメンバーは、それこそゲストの「お迎え」から「見送り」まで、ひとつひとつのメニューを支えた。

雪まつり スケッチ

薫風 in 本荘キャンパス HONJYO

本荘キャンパスの薫風・満天フィールド交流塾の活動は、「自然、人、社会との交流」の場を広げながら順調に進んでいる。

2月は「地域の伝統に触れる」をテーマに巨大タラの奉納で知られる^{かけよ}掛魚祭り（金浦町・金浦山神社）に参加。タラ汁もみんなで作り、その味を堪能した。

続いて下旬に開いたのが、学生が初めて企画・運営した「スノーウォーズ」～雪合戦～。キャンパス内の多目的広場に歓声がこだました。



「早く食べたい！」（本荘キャンパスカフェテラス）学生の感想は「タラはほとんどの部位を食べられる魚だと知った」

かけよ
掛魚祭り
H21.2.4



逃げて走っても、転んでも雪の上。参加者は「本格的な雪合戦はスポーツ性が高く楽しめた。ふだん余り話することがない人とチームを組めて新鮮でした」

スノーウォーズ
H21.2.17



このポーズ、決まってるでしょ。練習したんだ（本荘キャンパス多目的広場）



何キロあるんだろう？2人で担いでも重い（金浦山神社境内）。「タラの実物を見たのが初めてだったので、大きさにはびっくりした」という学生の反応もあった

ほかにもこんな活動が

「雪まつり」の陰に隠れた格好になってはいるが、交流塾の活動は多岐にわたっている。カヌーを作ったり、ソーセージ・燻製作りにいそしんだりしている。そして「あなたも参加してみませんか」と呼びかけている。



このカヌーは全長15フィート（約4・6メートル）。でも製作に携わる人が少なく、完成時期未定なんです！ぜひ参加を



腸詰めめは長さは4メートルとかなりの長さ。22日に煙をかけます。食べられます

「誰ひとり投げ出さなかった」 =雪まつり実行委報告書=

雪まつりが終わった。時折、手探り状態に陥りながらも、実行委員はその責任を果たした。やり通したからこそ、次回の課題を見据えた反省の言葉を紡ぎ出せる。メンバーの思いに耳を傾けてほしい。
(1、2、3面に関連記事)



主催者、ゲストが一堂に会して笑顔、笑顔

感謝の気持ち

実行委員の皆様、本当にお疲れ様でした。
サポートしていただいた教職員ならびに塾事務局の方々には多大なるご協力に深く感謝しております。
実行委員長という立場を振り返ると、実行委員の方々に迷惑をかけた点が多々あったと反省しています。
一例を挙げれば、食事の準備や後片付けでは、朝早くから夜遅くまで、疲労があったにも関わらず手伝っていただくということがありました。他大学との交流の機会が少なくなってしまったのは、私の計画不足が原因です。
それでも、今回の活動に対して先生たちの評価が高いのは、実行委員の方々の協力体制があったからこそだと思います。と同時に、雪まつりの計画・運営をする中で、実行委員内での絆が学科・学年を超えて深くなったのも確かではないでしょうか。
他大学の評価がどうであれ、無事に終わったことは、実行委員の皆様の頑張りの結果だと考えております。皆様、本当にありがとうございました。

実行委員長：アグリビジネス学科2年 佐々木亮太

ひとりじゃない

雪まつりを振り返ると、私は教職員の方々や実行委メンバーへの感謝の気持ちでいっぱいになります。大学間交流の副リーダーとして重責を感じ、時に一人で必死になっていた私のことを、みんなが支えてくれました。この場を借りてお礼を言います。
「ありがとう」
準備から開催までの活動を通じた私の反省は、みんなに自ら歩み寄るという働きかけが足りなかった点です。実行委員がお互いを知り意見を交わし、負担を分け合いながら皆で作上げていく。このことがいかに大切かを、今回の雪まつりは教えてくれました。この反省を、次に生かしていきたいです。
夏に向けての課題は、秋田県立大のどの学部・学科生も参加しやすく、楽しめる活動にすることだと思います。今回は他大学生や農家さんとの出会いがとても貴重なものだったので、実行委員だけが交流するのはもったいないと感じるからです。
薫風・満天フィールド交流塾は、多くの人々と出会う機会を与えてくれます。この魅力を生かした取り組みが、夏に向けて大切になると私は思います。

アグリビジネス学科2年 大西 夕紀

中心の外側

雪まつりを終え最初に思い浮かぶのは、委員長をはじめとする何かしらの役職についていた人たちや、その周りの一部の人たち、塾事務局職員の方の負担が、筆舌に尽くせないほど大きかったことです。
当日だけでなく、まつりが近づくにつれて増えていく仕事を、フィールドセンターに遅くまで残ってこなしたり、先生方と個別に話し合ったり、アパートや寮の自室などで資料を作ったり、雪遊びのために何回も視察に行っていたり…。それがとても顕著であり、反省すべき主要な問題です。
夏に行われる全国農業系学生フォーラム（仮称）や次回の雪まつりでは、このようなことがあってはならないと考えます。そのためには①委員会の学生同士がお互いを知るための機会を設ける②自分の意見をきちんと伝え合う③互いの負担を知り、翌年のために仕事を伝える一をしなければならないと思います。
口では簡単に言えますが、実践すれば思っている以上に難しいでしょう。しかし、実践しないことには向上は望めませんし、していかねばならないことです。
私個人としては、他大学と交流するのが初めてだったので楽しめましたが、参加したすべての人とは話せなかったのが、その点が残念でした。

生物環境科学科1年 松隈 詩織

雪まつりを終えて

雪まつりを終えて悔やまれるのは、みんなの気持ちが一つになれなかったということです。
他県からたくさんの学生が集まって、交流する経験がなかったため、実行委員がどのように動いたらいいのか分からず、すれ違いが生じてしまいました。まつり開催中に問題も発生し、実行委員や他大学の参加者への急な連絡ばかりで、困らせたこともありました。
準備不足をととても反省しております。今回の経験を、今夏のフォーラムに活かしたいと強く思っています。
最後に、今回の活動に協力してくださった先生方、塾事務局の方、雪まつり実行委員会の皆さんに、心から感謝の気持ちを表したいと思います。
大変、お世話になりました。

アグリビジネス学科1年 佐藤 旭浩

大学の垣根を越えて

今回の雪まつりには、農業に対して様々な考えを持つ大学生が集まった。そこには、私の予想を遥かに超えた農に熱い学生たちがいた。
郷土料理作りでは、いものこ汁やだまこもち・きりたんぼ作り挑戦。私自身、秋田に育ちながら、郷土料理を作ることがあまりなかったので、良い機会だった。雪遊びは、学年関係なく他大学のみんなと交流を深められた。関東から来た学生は「積もった雪で、初めて遊べたのが楽しかった」と話していた。
今回参加しなかった県立大学生も、次回は是非参加していただきたいと思う。
今後、このような活動をアピールするためには、他大学の農業系サークルや薫風・満天フィールド交流塾が持っているネットワークを集め、農業系学生ネットワークを設立することが大切だ。今回は、県大生は主催者側だったが、自分たちが他大学のイベントにも参加して、交流の輪が広がってほしいと思う。スカイプの利用で他大学生の学生を募り、大学間の垣根を越えた実行委員を立ち上げるのも面白いと思う。

アグリビジネス学科1年 露崎 香

雪まつりで得たこと

私は三種町・八竜地区でアスパラガスを“伏せ込み促成栽培”という方法で栽培している、加賀谷幸悦さん宅にお邪魔しました。
アスパラが、土に生えているのを見たのは初めてです。もうこれだけで満足していたのですが、さらにそのついでに生えていたアスパラを、生で食べさせていただきました。甘くて、みずみずしくて、切り口から水分がしみ出てくるのです。感動です。
ちなみに味はというと、やっぱりアスパラでした。
雪あそびは「寒かった」の一言に尽きます。雪と風ぐらいなら大丈夫だろうと思っていたのですが、雨は想定外でした。来年は、雪・雨・風とあらゆる事態に対して、万全でありたいと思います。
雪まつりの私のメインテーマは「農家の明日」です。今回の4日間は、このテーマの良い指針になったと感じております。

アグリビジネス学科1年 三浦 宏平

横顔
雪まつりの4日間、新聞部の撮影係として活動の現場を回った。そして今、心はまだ立ち尽くしている。実行委メンバーへの言葉が、散らばったまま輪郭を現さない。メンバーが奔走していた姿は、私の心にただならぬ何かを刻み込んだ。だから、中途半端な言葉を吐き出さず、メンバーが直視していた「現実」。その厳しさを語り尽くすことは到底できない。が、そこには「役に立ちたい」とひたむきに駆け回り、自らの力のなさに苛立ち悩み、人知れず涙した姿があった。それでも、気丈に

笑みを浮かべていたその横顔を、私は心に留めるしかできなかった。雪まつりを終えて反省すべき課題が残っていることは、メンバーの誰もが知っている。だが、幾つもの苦しみや、味わい続けながらも日々を乗り越え、それぞれに成長を実感しているに違いない。彼らから聴こえるのは、反省の言葉であって、後悔ではない。全国農業系学生フォーラム（仮称）へ向けて活かそうとする心意気は、もう夏へ向けての一步なのだ。雪まつりの最終日。西の空に心を委ね、ふと想った。「今夏、私は再び撮影係として夕陽を仰げるだろう。それとも」と。

生物環境科学科1年 植田 行則

雪まつりについて

初めに、雪まつりのために働いてくださった、実行委員の皆様、先生、事務、講師の方々に深く御礼申し上げます。
私は正直に言うと、今回の活動での自分の微力が本当に恥ずかしいです。みなさんがとても大変だと分かっていたながら、ただ指示をあおいだり、お手伝いするだけでした。
他大学との交流では、活動の中心に置いているもののギャップを、強く感じました。私は自分の時間を、農業に多く捧げることは出来ません。部活や他のことがあくまで私の中心です。
今回、他大学の学生や先生方には、私のような学生も参加しているという認識がなかったようで、実を言うと息苦しかったです。そういった状況の中で、頑張る大変さは言い表せませんし、理解されずに終わったのが悲しかったです。
反省点を夏につなげるためには、知り合えた他大学の学生にも運営に加わってもらうとか、規模の縮小も考えた方がよいのかなとも思います。
そして何より必要なのは、実行委員同士が信頼し合うために、事前に打ち解ける場を設けることだと思います。

応用生物科学科1年 菅原 美穂

細かな計画

今回の4日間で、他大学生や農家と話ができ、農業に興味を持つ学生の団体があるのを知ったのは、すごくよい刺激でした。季節や地域の風物詩の遊び、農家体験とその発表は、次回以降も続けてほしいと思いました。
夏の企画は「夏祭り+学生交流」という形にしてほしいです。
ですから、もっとよくするためにと考えて、出てきた反省点を述べます。
まず、3泊4日の日程はちょうどよかったのですが、時間の組み方の無理や、急な予定の変更が多かったのではないかと思います。
雪遊びの予定変更は不可抗力でしたが、予め別のプランを立てる必要があったのではないのでしょうか？ できるだけ細かなところまで想定した計画が必要だと実感しました。
食事は美味しかったです。でも少し作りすぎだった気がします。もちろん、余るのが勿体なくて、食べすぎて苦しんだ僕も悪いのですが……。

アグリビジネス学科1年 喜連 悟